

2. 河川維持管理上留意すべき事項

2. 1. 堤防・護岸等の安全性の確保

直轄管理区間の堤防整備は、完成堤防の割合が約8割（平成24年3月時点）であるものの、古くに築造されたものも多く、構成する土質が不明確であることに加え、降雨、浸透、洪水等の自然現象や車両乗り入れ等人為的な影響や時間経過に伴う老朽化により、堤防の寺勾配化・植生率の低下、堤防の変状や河岸洗掘等に伴う護岸の変状及び損傷している箇所があり、堤防弱体化による安全性の低下が懸念される。



【護岸変状状況】



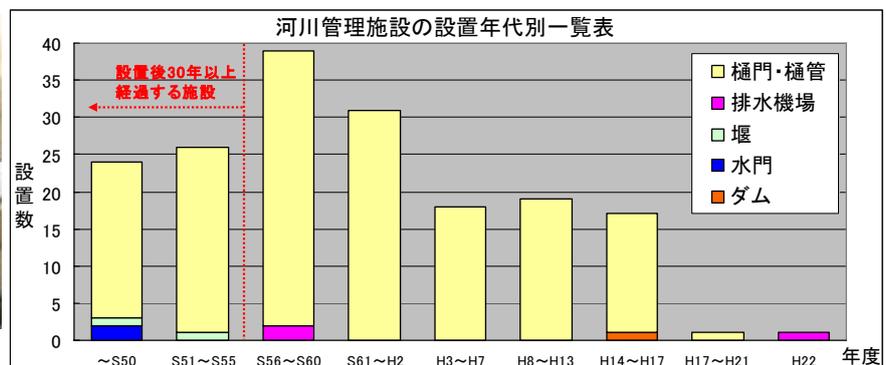
【堤防寺勾配状況】

2. 2. 水門等施設の維持管理

設置後30年以上経過する河川管理施設（全施設の約30%）が多くなってきており、老朽化への対応が必要な設備も年々増加し、維持管理費用も増加することから、設備の信頼性を確保しつつ効率的・効果的な維持管理の実現が急務となっている。



【施設腐食状況】



2. 3. 河道特性

(1) 土砂堆積及び河床低下・深掘れ

菊池川上流及び合志川中上流の河道内においては、土砂堆積傾向にあり、流下断面の減少、水門等河川管理施設の操作への支障、また、堰上流の取水への悪影響が懸念される。

また、堆積した土砂により河道内の滲筋が蛇行し、河岸沿いを流下することによって、河岸側の河床低下や深掘れが進行している箇所があり、堤防及び護岸等施設の機能低下や機能損失が懸念される。



【土砂堆積状況（合志川）】



【護岸基礎洗掘状況（合志川）】

(2) 樹木繁茂

菊池川をはじめ、岩野川、迫間川については、竹を主とする樹木が繁茂しており、洪水流下の阻害、洪水時の流倒木による施設や河川利用者への悪影響、また、成長した根茎の影響により、施設に変状等を及ぼす恐れがある。

特に、菊池川中流及び岩野川においては、洪水流下の阻害となっている樹木の繁茂が確認されるなど、治水機能の低下が懸念される。



【樹木繁茂状況（菊池川）】

【樹木繁茂状況（迫間川）】

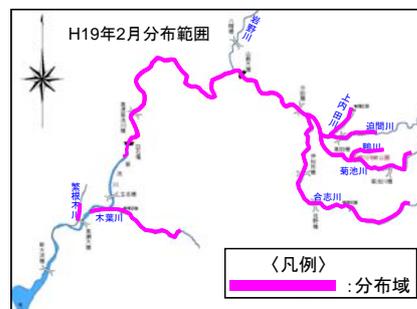
2. 4. 特定外来生物（ブラジルチドメグサ等）

菊池川の感潮区間を除くほぼ全川に特定外来生物に指定されている水草（ブラジルチドメグサ等）が繁茂している。河岸だけでなく水面に密生することから、在来種への影響、河川構造物の操作管理への支障などが懸念される。

また、洪水時等には多くのゴミとともに下流部や海岸部へ流出し、河川利用や漁業、船運等の支障、有明海の環境悪化等が懸念される。



【ブラジルチドメグサ繁茂状況】



【ブラジルチドメグサ分布状況】

3. 河川の区間区分

河川維持管理の目標や実施内容を定めるにあたって、状態把握の頻度等は河川の区間毎の特性に応じたものとする必要があるため、河川特性や背後地の土地利用等を考慮して、重要区間をA区間、通常区間をB区間として、以下のとおり区間区分する。なお、区間区分図は付図1のとおりである。

区 分	区 間
重要区間（A区間）	菊池川 49.8 k m (0k000 ～ 49k800)
	繁根本川 3.0 k m (0k000 ～ 3k000)
	木葉川 1.8 k m (0k000 ～ 1k800)
	岩野川 4.8 k m (0k000 ～ 4k800)
	合志川 8.0 k m (0k000 ～ 8k000)
	迫間川 9.3 k m (0k000 ～ 9k300)
	上内田川 2.2 k m (0k000 ～ 2k200)
通常区間（B区間）	合志川 2.4 k m (8k000 ～ 10k400)

<参考：区間区分の判別の目安>

堤 防	背後地	
	都市部、住宅密集地	山間部、農村部、中小河川
堤防高 4 m 以上	重要区間（A区間）	重要区間（A区間）
堤防高 4 m 未満		通常区間（B区間）

※ 堤防高とは、背後地盤と堤防天端の比高であり、堤防高 4 m を境界条件に区分した理由は、堤防への河川水浸透に伴う危険度の違いを考慮したものである。